

片岡 弘治編

『少数民族の生活と文化』

(シリーズ21世紀の民族と国家 第11巻)

未来社 1998年 276ページ

金澤 三郎

本書は、シリーズ「21世紀の民族と国家」の第11巻にあたり、少数民族や社会的少数派に属する集団、または社会集団に関するアジアの各地における論考からなる。今日、民族紛争や暴動が多発しており、その多くが多数派民族による少数派への抑圧や不平等が根底にある。本書の「はしがき」において、編者の片岡氏は民族紛争の背景に自民族中心主義があることを指摘しつつ、異なる文化を持つ人たちをもっと理解し、尊重することが重要であること、また歴史的に見れば、異文化が共生していた時代はとても長いと述べている。本書の論考は、異文化の理解に大きく役立つとともに、異文化の共生という問題についても大きく貢献しうるものである。

第1章は、吉松氏による「孤児はいかにして民族の象徴となったか—カレン人の孤児伝承—」と題する論考で、カレン人が民族意識をどのように形成していったかを考察している。吉松氏は、民族が意識されるにはそこに必ず異民族の存在があり、それによって自分たちの民族の共通性が認識されると述べ、社会的弱者である「孤児」と自分たちを同一視するには、ある異民族に比べ自分たちが劣っている、あるいは不当に虐げられているという認識が必要だとしている。20世紀後半、ミャンマー政府に虐げられたカレン人にとって、「孤児」が民族の象徴となっていった。こうして、カレン人の民族意識は異民族との接触によって規定されていくのである。このこと

は、他の民族対立を考察する上でも意識すべき重要なポイントである。

第2章では、小笠原氏による「イスラームと部族連帯意識（アサビーヤ）」と題する論考で、イスラーム出現以前のアラブ社会にあった部族連帯意識アサビーヤがイスラーム拡大のなかで、どのように変化したのかを考察している。小笠原氏は、アサビーヤとは基本的にイスラームに反目するものだが、政治的、軍事的には必要不可欠であり、完全に消え去ることはなく、きっかけがあればいつでも再燃すると述べている。

第3章の「中国語〈普通話〉の形成について」は、中国の民族共通語がいかにか形成されてきたかを考察するものである。著者の大石氏は、〈普通話〉の形成が近代的な国民国家の意識と関係していると指摘している。言語の違いは文化的共有の妨げとなるため、国家にとって困難な問題のひとつである。他方で言語は、民族アイデンティティーの構成要素としても重要なもので、国家的な統一に大きな役割を負っている。そういった問題を理解するためにも、この論考は重要な意味を持っている。

第4章は、石田氏はインドの「ダリトパンタル運動」を取り上げている。ダリト（不可触民）運動とは、カースト・ヒンドゥーによるダリトへの差別や社会的不利を克服し、地位向上を目指すものである。ダリトパンタル運動は、そういったダリト運動のひとつで、1970年代に起こった。石田氏は、自分のカー

ストの利益を越えた連帯の必要性を指摘しているが、近年の傾向は自分のカーストの利益を見て判断する状況が一般化しつつあると述べている。石田氏のカーストを越えた連帯の必要性という指摘は、非常に重要である。なぜならダリトパンタル運動が衰退した要因の一つとして、広く他のカーストや集団から支持を得られなかったことが挙げられるからである。

第5章は、押川氏による「ニヤイ物語の世界」である。ニヤイとは、インドネシアにとって植民地在住の外国人にあたるヨーロッパ人男性と同棲する女性たちをさす名称として用いられた。押川氏は、ニヤイを法的にヨーロッパ社会にも属さず、現地のインドネシア人からも隔てられた「少数派」として考察している。また、ニヤイの物語は、結局、男たちのまなざしから描かれたものだとしている。これは、政治力における性差を考える上で興味深いものである。

第6章の論考は「文化差異の管理－米定住のLao Hmong、1975年～85年（移行期）にみる援助への適応形態－」である。筆者の小泉氏はアメリカに難民として移住したラオスのモン族に起こった問題を考察している。小泉氏は、アメリカ当局が行なったモン族難民への大きな生活保障が、モン族難民の社会への不参加を助長し、依存を制度化してしまったとする。依存が長引けば、難民は自尊心を喪失し、無力さを感じ、生業からも切り離され、経済活動からも阻害される。このことから、経済的参加の機会をできる限り早く作り上げることが重要だと指摘する。援助が依存をもたらし、自尊心をも喪失させるという指摘は、少数派または社会的弱者にある異文化をどう捉えるかという視点においても重要であろう。

最終章にあたる第7章は、片岡氏の「イン

ティザール・フサインと動乱文学－ムハンマド・ウマル・メーモンの目を通して－」である。印パ分離独立にともないインド国内からパーキスターンに移住した作家フサインについての論考で、フサインの文学活動の根源には、インド人であり、イスラーム教徒であるという奇妙なジレンマがあり、そういった文化的矛盾が凝縮されていると指摘している。文化的矛盾という複雑で困難な問題を、文学という視点から読み解こうとしており、大変興味深いものとなっている。

このように本書は、少数民族についてさまざまな視点から考察している。民族を規定するもの自体多様であるため、民族問題を論じる際、さまざまな視点で見ていくことが必要となる。本書の各論考は、言語、文学、社会などさまざまな見方を提供している。したがって、本書は民族問題の理解に十分貢献するものとなっているのである。